

三田メディアセンター雑誌再配置2016

ひらぶきかよこ
平吹佳世子

(三田メディアセンター主任)

1 はじめに

三田メディアセンター（以下三田MC）の全蔵書数の4分の1は雑誌が占めている。製本雑誌は図書と比べて厚さや高さがあるため、多くの書架スペースを使うことになる。そのため、100万冊収容可能な新館書庫フロアの半分にあたる4フロアを占有していた。増加分のゆとりはなく、2011年に電子ジャーナルと重複している洋雑誌10,000冊を箱詰めして書架から撤去し、当時の保存書庫であった白楽サテライトライブラリーに置いていた。それでも、数年後にはスペースがなくなり書架の天板の上を使って雑誌を配架しなければならない状況となった。2014年に山中資料センター2号棟（以下山中2号棟）の建設が決定した段階で、さらに増加した電子ジャーナルと重複している洋雑誌を移動することを決め、山中2号棟が完成した翌年の2016年にそれらを移動した。

山中2号棟へ資料移動後、新館には80,000冊分のゆとりが生まれた。雑誌担当が管轄している資料群には、和雑誌、洋雑誌のほか、中国語、韓国語、ロシア語などの雑誌、統計・年鑑、判例・法令、議会資料、新聞などがあり、これらの資料群を和洋別および年代で区切って複数のフロアに分散して配置していた。その煩雑さのため利用者にはわかりにくく、配置場所を示す図書館システムコード名が150近くあるため、新人スタッフも配置場所コード名を覚えるために苦勞していた。これを改善するために「できる限りわかりやすく！」を目標に、新館フロアの雑誌再配置に取り組んだ。

以下に、山中2号棟への洋雑誌移動とその後の雑誌再配置を併せて報告する。

2 山中2号棟移動雑誌の選定（2014年度）

電子ジャーナルの増加により冊子の利用が減少している洋雑誌を山中2号棟へ移動することは、雑誌担当としても最善の選択と考えていたが、いざ、どの雑誌を何冊山中2号棟へ移動するかを決定するには、1年半の準備期間が必要であった。山中2号棟

への移動は、雑誌だけでなく図書も予定されていたため、山中2号棟の収容可能棚数から雑誌の移動可能棚数を算出する必要があり、洋雑誌約200,000冊について、電子ジャーナルとの重複調査を詳細に行うことから準備を始めた。週1回ミーティングを行い、雑誌1誌のうち電子ジャーナルが部分的に利用可能な場合はどうするか、新刊雑誌をどうするかなど、雑誌特有の課題をクリアするための検討を繰り返した。その結果、利用者はKOSMOS（蔵書検索システム）から1冊ごとの配置場所を検索することが可能であり、年代で配置場所が複数に分かれても大丈夫であろうと判断し、2010年以前の重複部分のみを移動することとした。三田キャンパスから66,000冊の洋雑誌、11,000冊の中国語、韓国語雑誌を、加えて日本の議会資料3,000冊、外国の議会資料14,000冊も移動することにした。

1年半の準備期間の中で、最後まで悩んだのは、日吉キャンパスにある日吉保存書庫に別置していた1959年以前の洋雑誌50,000冊の行き場であった。山中2号棟への移動と引換えに日吉保存書庫から三田MCの蔵書を引き上げることも決まっていた。電子ジャーナルとの重複雑誌のみを山中2号棟へ移動した場合、12,000冊が山中2号棟、残り38,000冊は三田キャンパスへ戻ることが明らかになった。戻したものを現状の書架に組み込むべきか、三田キャンパス内の別の場所に置くかなどについても検討を繰り返した。また日吉保存書庫の利用状況確認やアンケート調査も行い、最終的に50,000冊全てを山中2号棟へ移動することにした。このため、1959年以前の洋雑誌については、電子ジャーナルと重複していないものも山中2号棟へ移動している。

一方でアンケート結果をふまえ、劣化が激しく、なおかつ史料価値がある1700年以前の雑誌および大型雑誌の一部などの1,200冊は日吉保存書庫に置いたままとし、利用希望があった場合に三田へ取り寄せるなどの措置はとらず日吉で閲覧することとした。

2016年10月から翌年3月までの6か月間は2名の派遣職員を雇った。この2名には、移動作業だけでなく、移動した資料群ごとに蔵書点検もお願いした。これにより、資料の配架間違いも解消され、同時にデータの点検・修正も行うことができた。約8か月間の作業はスケジュール通り滞りなく進行、2017年4月の新学期に間に合わせる事が出来た。



図3 山中2号棟移動後の歯抜け状態の書架

6 雑誌再配置結果

今回の再配置では、大きな目玉がいくつかあった。これまで和洋別でさらに年代で区切っていた判例・法令を全て4階の1フロアにまとめたこと(図4)、国際機関の資料も、年代や機関により複数のフロアに分かれていたものを全て地下5階の1フロアにまとめたこと、和洋別になっていた統計・年鑑を年代は区切るが、和洋の別なく3階、地下5階の2フロアに収めたことである。

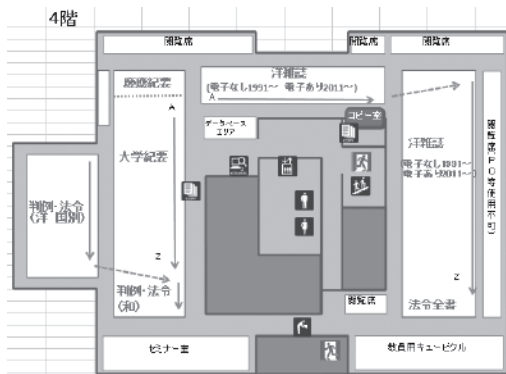


図4 再配置後の4階フロアマップ

この他に、利用の多い大学紀要を地下4階の電動集密書架から4階へ移動し、利用が重なると他の利用者が待たなければならないなどの問題を解消した。同時に、慶應義塾大学の刊行物も他大学と同じ4階フロアにまとめたため、わかりやすさの点では効果を上げることができた。配置場所を示す図書館システムコード名は、国別に50以上あった判例・法令や、機関別に50以上あった国際機関を最小限にし、全体の3分の1に縮小した。洋雑誌の書架にはゆとりが生まれ、配架がスムーズにできるようになった。資料の配置に関するサインやフロアマップが簡便になり、断り書きなどの余計な掲示が削減され、新館の雑誌フロア全体がスッキリ綺麗になった。

7 おわりに

山中2号棟への移動開始から1年、再配置終了から5か月が経過したが、移動した資料の配置場所に対する混乱はほとんどなく、今回の雑誌再配置は成功だったといえよう。書架スペースがスッキリしたため、ようやく閲覧スペースへも目が向けられるようになった。

今回、和雑誌については、全体的な書架調整をするに留めたため、このまま購読を維持した場合、5年後には書架不足が予測される。今回の再配置検討時には、5年後の対応についてもある程度検討はしたが、資料移動作業は免れないであろう。洋雑誌についても10年後にはまた書架不足が予測される。山中2号棟も既に満杯のため、書架スペースとの闘いは終わらない。今後も、利用者のニーズに応えつつ、書架スペースと利用スペースの両面について検討を続けていきたい。